三国小学校遺跡６・７

小郡市文化財調査報告書第 332 集

２０２０

小郡市教育委員会

＜序　文＞

今回報告いたします「三国小学校遺跡」は、小郡市内でも唯一の小学校内に存在する遺跡です。

三国小学校遺跡では、今回を含めて７回の発掘調査を行っており、弥生時代の集落跡や中・近世の生活遺構などが調査されています。調査中には、社会科の歴史授業で身近な遺跡の調査を見学し、体感してもらうことができました。

調査にあたりましては、三国小学校をはじめ、関係諸機関、周辺住民の皆様、そして現地作業にあたった地元作業員の皆様などのご理解とご協力をいただきました。記して感謝を申し上げ、序文といたします。

令和２年３月 31 日　　小郡市教育委員会 教育長　秋永　晃生

＜例　言＞

1. 本書は、平成 30 年度に行った小郡市三沢に所在する三国小学校関係施設建設に伴う三国小学校遺跡６・７発掘調査報告書である。調査は小郡市教育委員会文化財課が実施した。
2. 三国小学校遺跡６は給食施設建設に伴う調査で、平成 30 年５月１日から平成 30 年５月 30 日まで実施した。調査面積は、398.66㎡である。
3. 三国小学校７は学童保育施設建設に伴う調査で、平成 30 年 12 月５日から平成 30 年 12 月 27 日まで実施した。調査面積は、200㎡である。
4. 遺構の実測は担当者のほか、一木賢人、久住愛子、宮崎美穂子、林知恵、山川清日、牛原真弓の協力があった。遺物の実測は山崎頼人、久住愛子が行った。トレースは林知恵が行った。遺物の撮影は（有）システム・レコに委託した。
5. 本書中の方位は座標北を示し、図上の座標は国土座標第Ⅱ系 (世界測地系) に拠る。
6. 遺物・実測図・写真は、小郡市埋蔵文化財調査センターにて保管・管理している。
7. 本書の執筆は杉本岳史・山崎頼人、編集は山崎頼人が行った。

＜目　次＞

第１章　調査の経過と組織…… 1
第２章　位置と環境…… 2
第３章　三国小学校遺跡６の調査成果…… 4
第４章　三国小学校遺跡７の調果成果…… 13
第５章　調査成果のまとめ…… 18

第１図　三国小学校遺跡６・７調査地位置図(S=1/2500) ……2
第２図　三国小学校遺跡周辺遺跡分布(S=1/25000) ……3
第３図　三国小学校遺跡６遺構配置図(S=1/100) ……6
第４図　SC01平･断面図(S=1/40)……7
第５図　SC02･03･04平･断面図(S=1/40)……8
第６図　SC06平･断面図(S=1/40)……9
第７図　ＳＸ05　SC07平･断面図(S=1/40) …… 10
第８図　三国小学校遺跡６出土土器実測図(S=1/4) …… 11
第９図　三国小学校遺跡7全体図(S=1/60) …… 12
第10図　1号土坑実測図(S=1/40) …… 13
第11図　2･3号土坑実測図(S=1/40) …… 14
第12図　1･2号土坑出土遺物実測図(S=1/4) …… 15
第13図　4･5号土坑実測図(S=1/40) …… 16
第14図　3～5号土坑出土遺物実測図(S=1/4) …… 17

図版１　三国小学校６
①三国小学校遺跡６全景（北から）　②調査区南半遠景（南西から）
図版２　三国小学校６
① SC01 土層断面（南東から）　② SC01 土層断面（南から）
③ SC01 中央土坑土層断面（西から）　④ SC01P1 土層断面（西から）
⑤ SC01 中央土坑と P1（西から）　⑥ SC01 全景（北東から）
⑦ SC01 土器出土状況（南から）　⑧ SC02 全景（西から）
図版３　三国小学校６
① SC04 全景（北から）　② SC06 全景（南から）
③ SX05 土層断面（南西から）　④ SX05・SC07 土層断面（西から）
⑤ SX05・SC07 全景（北西から）　⑥遺構掘削作業風景（南東から）
⑦三国小学校児童見学風景①　⑧三国小学校児童見学風景②
図版４　三国小学校６　出土遺物
図版５　三国小学校７
①三国小学校７調査区全景（北側から）　②１・２号土坑完掘（南西側から）
③１号土坑土層（南側から）　④２号土坑土層（南西側から）
⑤３号土坑土層（西側から）　⑥３号土坑完掘（東側から）
⑦４号土坑完掘（南側から）　⑧５号土坑完掘（東側から）
図版６　三国小学校７　出土遺物

第１章　調査の経過と組織

１．調査に至る経過

三国小学校遺跡６は、平成30年３月７日付で「埋蔵文化財の有無について（照会）」（事前審査番号17152）の申請が、小郡市長 加地良光 の名で提出されたことに始まる。平成30年度に三国小学校の自校式給食室建設に伴い、小郡市教育委員会教務課施設係と調整を行い、４月中に調査範囲のフェンス設置を進め、５月１日から調査に入った。

三国小学校遺跡７の開発事業に関する当該地の事前審査は、平成29年５月８日付で「埋蔵文化財の有無について（照会）」（事前審査番号17018）の申請が、小郡市長 加地良光 の名で提出されたことに始まる。これを受けて小郡市教育委員会は翌年５月25日に試掘調査を実施し、掘削予定範囲に遺跡が存在することを確認した。その後、建物建築位置の調整などを経て、平成30年12月５日付で発掘調査に着手した。

２．調査の経過

【三国小学校遺跡６】

５月１日　表土剥ぎ１日目　アスファルトの切削、表土掘削を行う。遺構面は非常に浅く、転圧がかけられているようで非常に堅い。小学校との話し合いで機械掘削は児童の登下校時を外した時間帯で実施する。
５月４日　メイストームで調査区のフェンスが倒れていたため、他のフェンスも前以て倒しておく。
５月７日　児童が登校する前にフェンスを再設置することにした。
５月８日　表土剥ぎ２日目
５月９日　遺構検出開始。削平により遺構も浅い。
５月10日　SC01 掘削。検出時は溝状のものと考えたが、住居となることがわかる。
５月15日　「三国小発掘新聞」の配布・掲示を行う（６年生５クラス分と校内と調査区）。
５月22日　全景写真のための清掃・写真撮影。
５月23日　住居等の遺構実測。
５月24日　三国小学校６年生遺跡見学（9：30 ～ 12:00　５クラス）
５月30日　埋戻し作業が終了し、山崎は６月１日から熊本地震復興調査宇城市派遣へ。

【三国小学校７】

12月５日　調査着手。重機による表土剥ぎを実施。
12月10日　発掘作業員を投入し、遺構の検出・掘削開始。
12月19日　ほぼ完掘し、全体写真撮影。三国小６年生の見学。
12月21日　全体図作成。
12月27日　埋め戻しを行い、調査完了。

３．調査組織

［平成30年度調査　令和元年度整理作業］

小郡市教育委員会

教 育 長	清武　輝	（令和元年10月～　秋永　晃生）
教育部長	黒岩　重彦	
文化財課　課長	柏原　孝俊	係長　杉本　岳史（７次調査・整理担当）
技師	山崎　頼人	（６次調査・整理担当）
	稲村　麻未	（平成30年度６次調査担当）

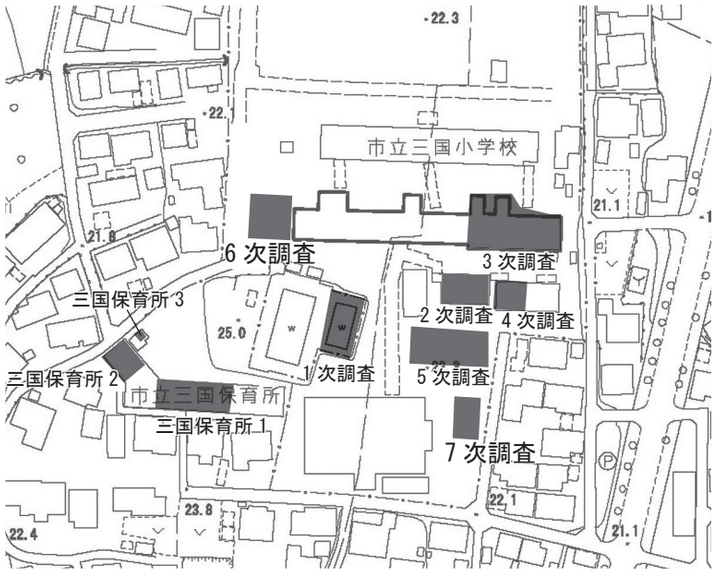
第２章　位置と環境

１．地理的環境

三国小学校遺跡が所在する丘陵地帯は、かつて筑前・筑後・肥前の国境であったことから、「三国丘陵」と呼ばれている。三国丘陵は背振山系から東へ派生して続く、標高 30 ～ 40 mのなだらかな低丘陵地帯が多くを占め、小郡市域の北西部、筑紫野市域の南部、佐賀県基山町の一部にあたる。最高地点は標高 94 mを測り、現在は福岡･佐賀県境となっている。この丘陵部は北部の筑紫野市宮地岳付近と併せて平野が急峻となる「二日市地狭帯」の一部を構成し、福岡平野と筑後平野の両平野を結ぶ地域である。丘陵地以南では宝満川やその支流域に見られる扇状台地（中位から低位段丘）が発達する。丘陵には複雑に浅い谷が入り込んで小河川の源となり、小河川はいくつかが合流しながら市内のほぼ中央を南流する宝満川へと注ぐ。

２．歴史的環境

三国小学校遺跡は、これまでに５次の調査が行われている（第１図）。第１次調査[1]は昭和 56 年に低学年用プール建設に伴い 220㎡の調査が行われ、中期末から後期初頭の住居跡３軒、円形周溝状遺構１基、掘立柱建物１軒が検出された。第２次調査[2]は昭和 61 年に鉄筋校舎増築に伴い、500㎡が調査され、１次調査と同時期の住居跡１軒等が検出された。第３次調査[3]は特別教室の建設に伴い、平成２年に 185㎡の調査が行われた。江戸時代の遺構・遺物が多く検出された。弥生時代の遺構では掘立柱建物１軒、円形周溝状遺構２基、竪穴住居跡２基が調査された。詳細な時期は遺構の残存が悪く不明であるが、１・２次調査と同様の時期に収まるかと思われる。４次調査[4]では校舎新設に伴い平成 22 年に約 200㎡の調査が行われた。近世から現代の土坑２基、溝２条のほか、落とし穴状遺構２基が検出された。戦時下の陸軍用品の陶磁器が出土したことは特筆される。第５次調査[5]は校舎新設に伴い平成 27 年に 245㎡が調査された。中世から近世の遺構が主に調査された。近世の石組み土坑からは鉄滓や木炭片が多く出土しており鍛冶に関連する遺構とされているが、詳細は不明である。隣接する遺跡ではみくに保育所内遺跡（１～４次調査）[6]があり、三国小学校遺跡の西から北側にかけての弥生時代集落との関連する集落であるだろう。



第１図　三国小学校遺跡６・７調査地位置図（S ＝ 1 /2500）

今回報告する６・７次調査を中心に三国小学校遺跡に関連した時代背景を述べる（第２図）。

旧石器時代遺跡は、福岡平野から筑紫平野に抜ける「二日市地狭帯（低地帯）」付近および三国丘陵や宝満川流域にかけて多く分布している。三国小学校遺跡１次調査でも剥片尖頭器が出土している。続く縄文時代では集落跡などの良好な遺跡は未発見であるが、横隈山遺跡（６）では谷部より早期から後期に亘るまとまった資料が出土している。また、科学的分析により縄文時代早期前後とされる落とし穴状遺構が丘陵、中位段丘縁辺で多く確認されている。そのなかでも北松尾口遺跡（３）では遺構内から条痕文土器が出土しており時期比定の参考になる。市内で確認される落とし穴状遺構は北部の三国丘陵、宝満川右岸段丘上、宝満川左岸の花立山周辺低台地上に多く分布する。

弥生時代になると、市域の人間活動は活発化する。それらの分布は小郡市北部三国丘陵と宝満川右岸の

市中南部段丘上、宝満川左岸の花立山周辺低段丘上に立地する遺跡に大きく分けられる。三国丘陵域では弥生時代前期～中期前半にかけての遺跡が数多く所在しており、弥生社会発展過程のモデル地域のひとつとなっている。前期前半代には、力武内畑遺跡（８）が三国丘陵と連なる段丘先端部で出現する。遺跡は沖積低地から段丘面にかけて営まれ、緩やかな段丘崖を検出している。沖積低地部分で井堰や水路群、水田畦畔が検出され、段丘面上では松菊里型住居で構成される居住域が検出された。当該期の墓域は三国丘陵部の三国の鼻遺跡や横隈上内畑遺跡（７）で確認されている。

第２図　三国小学校遺跡周辺遺跡分布図（S ＝ 1 /25000）
1 三国小学校遺跡　2 みくに保育所内遺跡　3 北松尾口遺跡　4 三沢北中尾遺跡
5 横隈狐塚遺跡　6 横隈山遺跡　7 横隈上内畑遺跡　8 力武内畑遺跡　9 旧筑前街道

当地域では段丘裾に進出した地域開発の拠点的集落（力武内畑遺跡など）が「母村―分村」関係を軸に、谷筋を共有しながら前期中頃から中期前半にかけて、丘陵上に変遷していく様子が窺える。横隈山遺跡（６）第６・７地点、横隈山遺跡第５地点・三沢北中尾遺跡（４）７地点、三沢北中尾遺跡１地点では貯蔵穴群を包括する環濠が集落変遷に伴い掘削される。環濠は三国丘陵域では、ほかに津古内畑遺跡、横隈北田遺跡でも確認されている。

中期後半以降になると、三国丘陵上での集落は散在し、前期末に見せた状況とかけ離れる。弥生時代後期遺跡は前期前半代の遺跡立地に近い。例えば、沖積平野を見下ろす丘陵斜面に前期前半から墳墓が営まれる三国の鼻遺跡では丘陵頂部に環濠集落が営まれる。比高差２～３ｍの谷部と面した低丘陵上に立地する三沢栗原遺跡では弥生時代前期前半の竪穴建物跡、中期末から古墳時代前期にかけて 100 軒近い竪穴建物が検出されている。横隈狐塚遺跡（５）では中期後半から古墳時代前期に至る甕棺墓 167 基、土壙墓 187 基、石棺墓 10 基で構成される墓域が調査されている。

中世から近世にかけては、中世から江戸時代初期の主要道である旧筑前街道（９）が本遺跡の東側 200 ｍ程を南北に走っており、人々の活発な往来がうかがえ、横隈宿とその周辺で遺構が確認されている。

註１：小郡市教育委員会 1981『三国小学校遺跡』小郡市文化財調査報告書第 10 集
註２：小郡市教育委員会 1987『三国小学校遺跡Ⅱ　吹上赤土遺跡』小郡市文化財調査報告書第 36 集
註３：小郡市教育委員会 1997『埋蔵文化財調査報告書１』（所収「三国小学校遺跡３」）
小郡市文化財調査報告書第 115 集
註４：小郡市教育委員会 2015『埋蔵文化財調査報告書６』（所収「三国小学校遺跡４」）
小郡市文化財調査報告書第 287 集
註５：小郡市教育委員会 2017『三国小学校遺跡５』小郡市文化財調査報告書第 311 集
註６：小郡市教育委員会 1981『みくに保育所内遺跡　吹上・北畠遺跡』小郡市文化財調査報告書第８集
小郡市教育委員会 1997『埋蔵文化財調査報告書１』（所収「みくに保育所内遺跡２」）
小郡市文化財調査報告書第 115 集
小郡市教育委員会 2015『埋蔵文化財調査報告書６』（所収「みくに保育所内遺跡３　みくに保育所内遺跡４」）
小郡市文化財調査報告書第 287 集

第３章　三国小学校遺跡６の調査成果

１．調査の概要

本調査区は三国小学校１次調査や三国保育所内遺跡に近接することから弥生時代中期末～後期前葉にかけての集落の広がりが明らかになる調査と予想された。

駐車場として利用されていたこともあり、検出面はかなり転圧を受けて固い地盤であった。地形的には南側から北側に緩やかに下がるようであるが、三国保育所や１次調査の跡に建設されたプールとの比高差が１ｍ程度は確認できるので、小学校が出来た際に利用しやすいように平坦面を作り削平されているのであろう。

調査では弥生時代前期の住居跡１軒と残りが悪く詳細な時期が不明であるが弥生時代の中期から後期を中心とした住居跡も検出されている。

２．調査の成果

（１）弥生時代の遺構と遺物

SC01（第３・４図　図版２）

調査区の南西で検出した。およそ半分は調査区外に及ぶ。平面プランは長円形である。削平が大きく、残存は悪い。東側では深さ 10㎝に満たない浅い張り出し部分がみられ、明確な切り合い関係はなく土層断面の観察から一連の住居と考えた。住居の中央部分でも深さ 15㎝程度である。

中央に位置すると考えらる土坑と近接して主柱がみられ、松菊里型住居である。もう一方の主柱は調査区外に及んでいると思われる。

中央土坑は径 48㎝、深さ 18㎝で東側にテラス面を持っている。埋土は炭化物や粘質土ブロックを多く含む層がみられる。明確な被熱痕跡や焼土はみられない。

P1 は径 30 ～ 35㎝程度、深さ 18㎝である。東側にテラス部分を持ち、ブロック土を含む埋土である。

床面から土器が出土しており、図示した。２箇所に土器が散在しており、土器１の箇所では甕底部（４）・（５）が出土した。土器２箇所では壺の底部（２）が出土した。ほかに小壺口縁部（１）、甕底部（３）が埋土中から出土している。

出土遺物（第８図　図版４）

１は SC01 南東の埋土中から出土した小壺の口縁部片である。内傾する頸部から強く屈曲して口縁部を創出している。口縁部の貼り付けはなく肥厚しない。内外面ともナデ成形で、頸部には横方向のミガキかと考えられる痕跡がわずかに見られた。残存高さは 2.7㎝。色調は内面 10YR7/6 明黄褐色、外面 10YR6/3 にぶい黄橙色で胎土には２mm 以下の石英・長石粒を含んでいる。

２（図版 4-1）は壺底部である。土器２箇所から出土している。底部は径 7.8㎝の平底で、外面には底部付近でハケメ、上位で斜め方向のミガキが確認できる。内面は指おさえ・ナデがみられる。色調は内面 10YR6/6 明黄褐色、外面 10YR4/2 灰黄褐色、胎土は 2㎜以下の石英・長石・花崗岩粒を含んでいる。

３（図版 4-3）は甕底部である。南東の埋土中からの出土である。外面には被熱痕跡、内面にはうすいコゲが確認できる。底部は径 7.6㎝の平底で、外面はナデ成形、内面は指押さえを残している。色調は内面 7.5YR5/6 明褐色、外面 10YR5/6 明褐色、胎土は２㎜以下の石英・長石粒を多く含んでいる。

４（図版 4-2）は土器１箇所から出土しているが、南東側の住居埋土とも接合し、ある程度の範囲に破片が及んでいる。底部は径 8.7㎝で、中央部分が不定ナデを施しやや凹面となっている。外面は指オサエ･板ナデ、内面はナデがみられる。色調は内面 6/4 にぶい黄橙色、外面 10YR7/4 にぶい黄橙色で、胎土は２㎜以下の石英･長石粒を多く含んでいる。

５（図版 4-4）は土器１箇所から出土しているが、南西側の住居埋土とも接合し、ある程度の範囲に破片が及んでいる。

底部は径 7.8㎝、残存高さ 9.9㎝である。底部はわずかに凹面を呈す。外面は板ナデ、内面は指オサエを板ナデで消している。色調は内面 10YR6/6 明黄褐色、外面 10YR4/2 灰黄褐色で、胎土は２㎜以下の石英・長

石・花崗岩を多く含んでいる。

SC02（第３・５図　図版２）

調査区北側で検出した。攪乱及び長円の土坑に先行し、SC03 より後出する。多くは調査区外に及んでいるが、南東隅を検出しており長方形の住居跡と考えられる。

北東端で段差を検出しており、ベッド状遺構の可能性がある。検出は非常に悪く、ベッド状遺構の高い部分で深さ５㎝程度、深いところで 10㎝程度である。埋土は非常に締まっており、灰褐色砂質土に黄褐色粘質シルトブロックが入る。貼床層もしくは床面近くで踏み締まった使用面に近い層と思われる。

出土遺物はみられない。

SC03（第３・５図）

SC02 に北西側を切られ、北側は調査区外に及ぶ。南東隅を検出しており、方形もしくは長方形の住居跡と考えられる。床面までの深さは５㎝程度と残りが悪い。SC02 と同様に貼床層中の検出の可能性が考えられる。

出土遺物はみられない。

SC04（第３・５図　図版３）

調査区北東隅で検出した。ややいびつな方形状を呈しており、北側は調査区外に及ぶ。SC06、SX05 より後出する。南北に走る排水パイプに中央部分を壊されており、削平も大きく受けており非常に残存が悪く、床面まで５㎝もない。東西 2.4 m、南北 2.6 m以上を測る。埋土は黒褐色から茶褐色砂質土で。小さい礫やシャモットを含む締まった土である。住居の下層遺構のみが残存する。住居と考えているが、内部施設は不明である。

弥生土器甕小片が出土している。

SC06（第３・６図　図版３）

調査区北東隅で検出した。SC04・SX05 に先行し、およそ 1/2 が調査区外に及ぶ。

径６m程度の円形住居で、深さは５㎝程度で削平が大きく、床面は中心に向かって緩やかに傾斜している。中央土坑と主柱１基を検出した。柱構造は検出範囲で考えると２主柱の可能性が考えられる。中央土坑は長円形で、長軸 60㎝、短軸 38㎝、深さ３㎝である。埋土は砂混じりの黒褐色シルトである。中央土坑より南側 1.6 mの位置に径 35㎝程度、深さ 18㎝のピットがある。埋土は小さい黄ブロック土を含む黒褐色シルトである。床下には３㎝程度の貼床状の締まった土（黄色粘質土に若干の黒褐色土混じり）が確認されている。

出土遺物はみられない。

SC07（第３・７図　図版３）

調査区北東隅で検出した。大きく削平を受けており、残存は非常に悪く、床面までの深さは２㎝程度であり、礫混じりの明褐色から茶褐色砂質土で住居下層中での検出である。多くは調査区外に及んでいるため全体の規模は不明である。SX05 に切られており、SX05 の下層より、L 字形に曲がる小規模な溝を検出し、住居のベッド状遺構になると判断した。ベッド状遺構の規模は東西 1.6 m幅で延長は不明である。

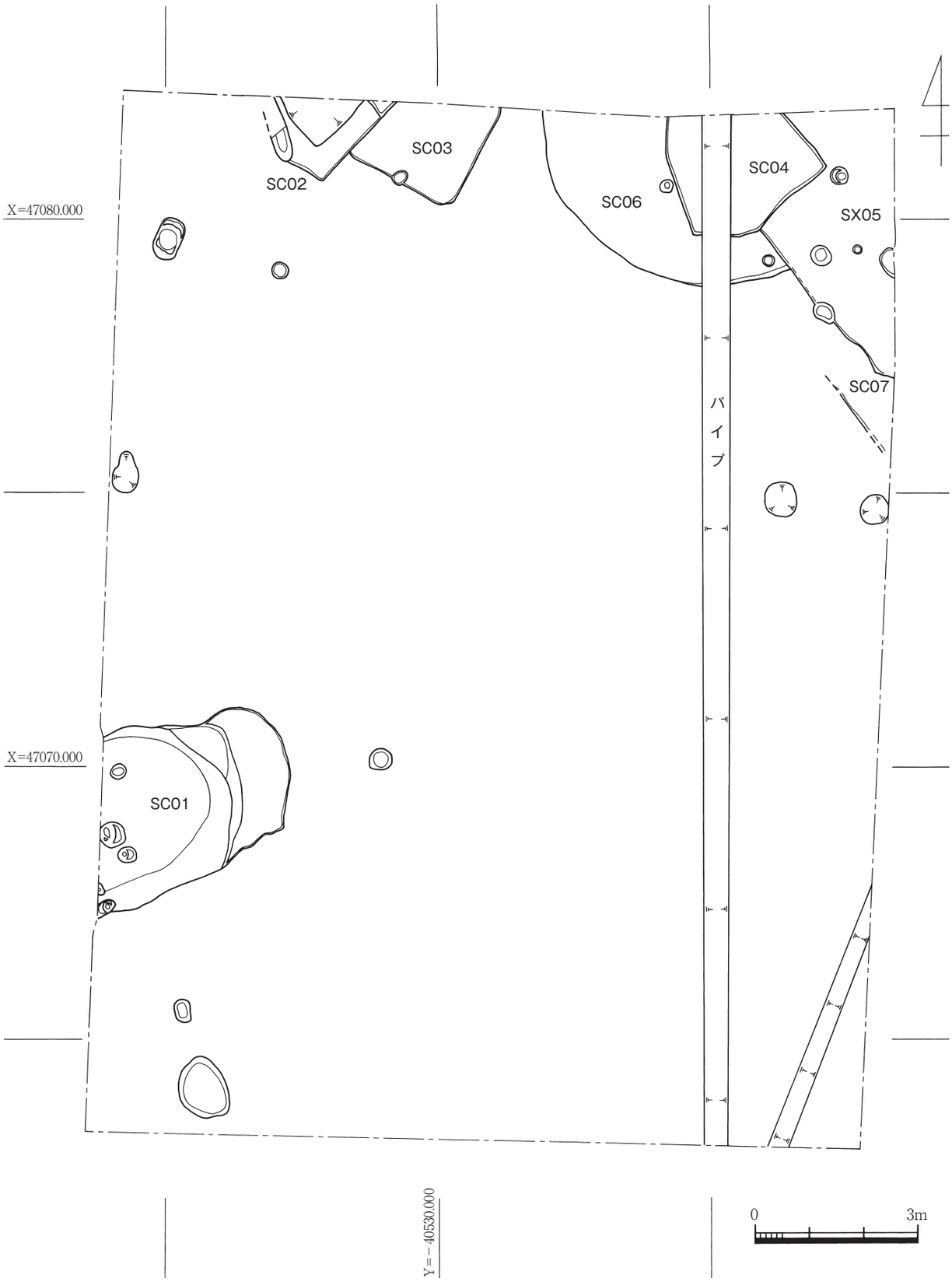
出土遺物はみられない。

（２）不明遺構

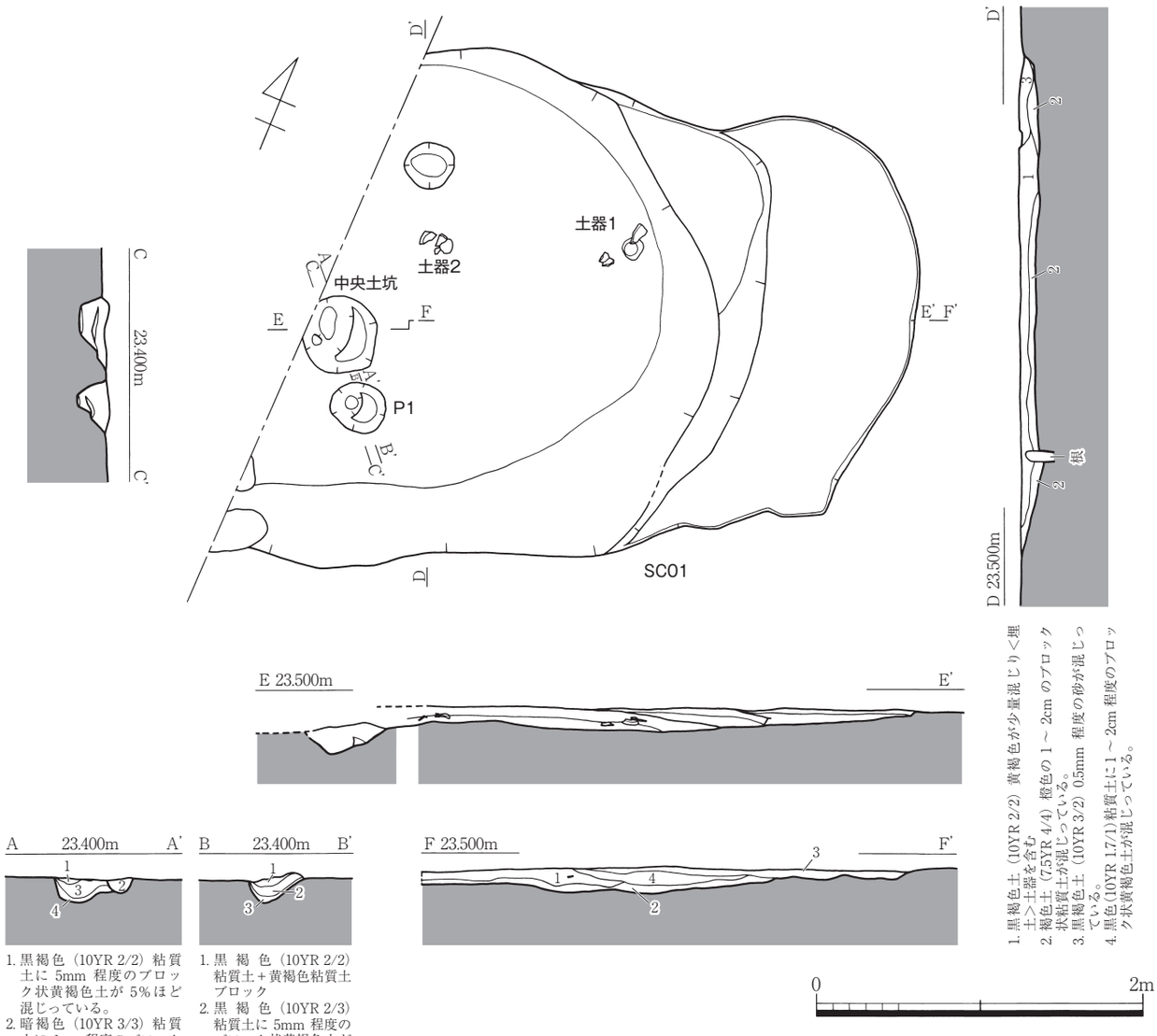
SX05（第３・７図　図版３）

調査区北東隅で検出した。SC06・07 に後出し、SC04 に先行する。もともとの南側から北側に傾斜する地形を整地したものと考えている。南側では 12㎝、北側では 28㎝の深さがある。底には鉄分が沈着しており、検出の目安となった。埋土は地山土に類似しているが礫やくさり礫を多く含むにぶい褐色～明茶褐色、暗茶褐色土である。堆積土中や底面から数基のピットが確認されている。

出土遺物はみられない。



第３図　三国小学校遺跡６遺構配置図（S = 1 /100）

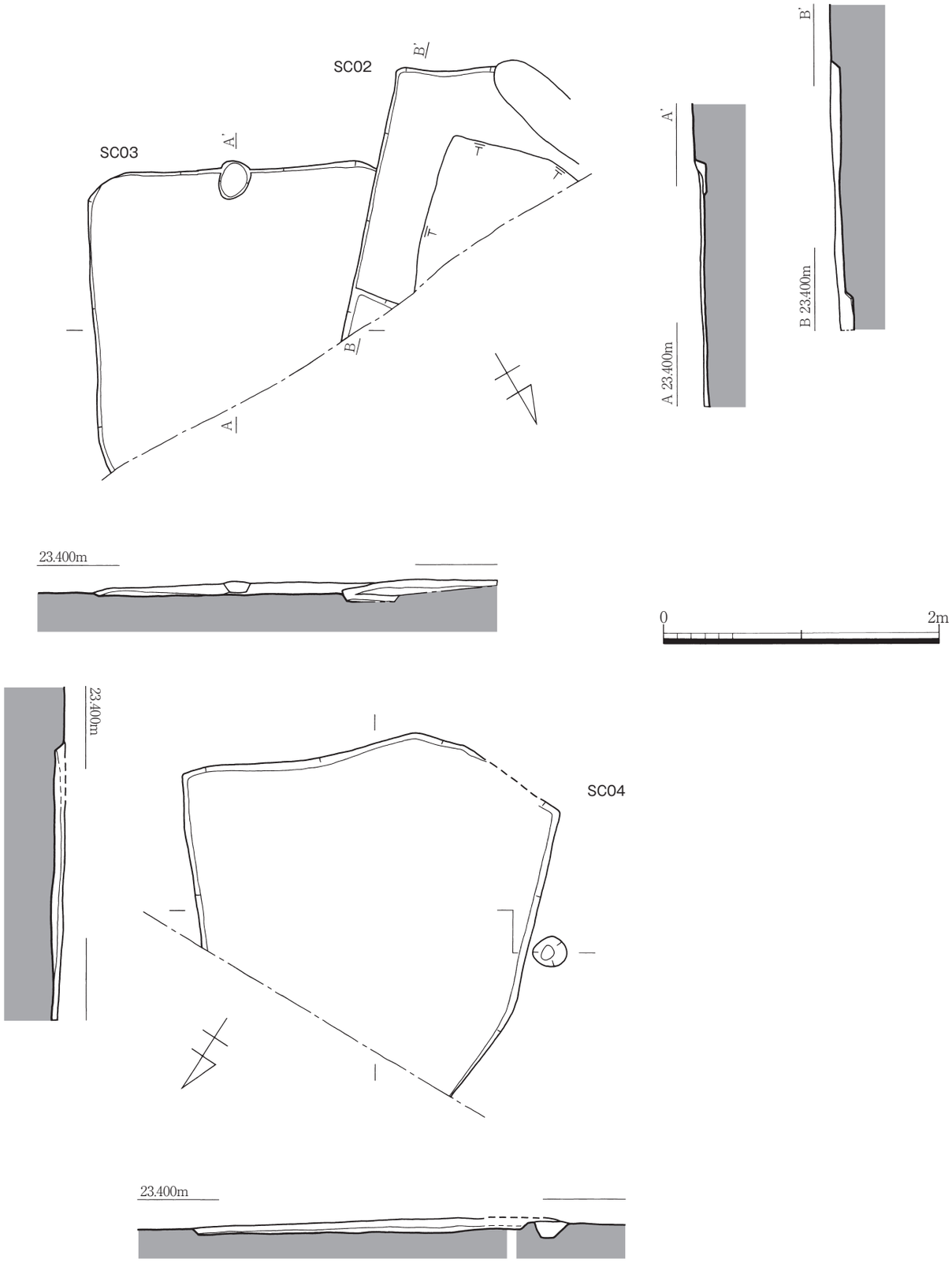


1. 黒褐色（10YR 2/2）粘質土に 5mm 程度のブロック状黄褐色土が 5%ほど混じっている。
2. 暗褐色（10YR 3/3）粘質土に 1cm 程度のブロック状黄褐色土が 40%ほど混じっている。
3. 暗褐色（7.5YR 3/3）粘質土にブロック状黄褐色土とブロック状黒色土が混じっている。
4. 褐色（7.5YR 4/4）粘質土＋灰褐色粘質土ブロック混じり

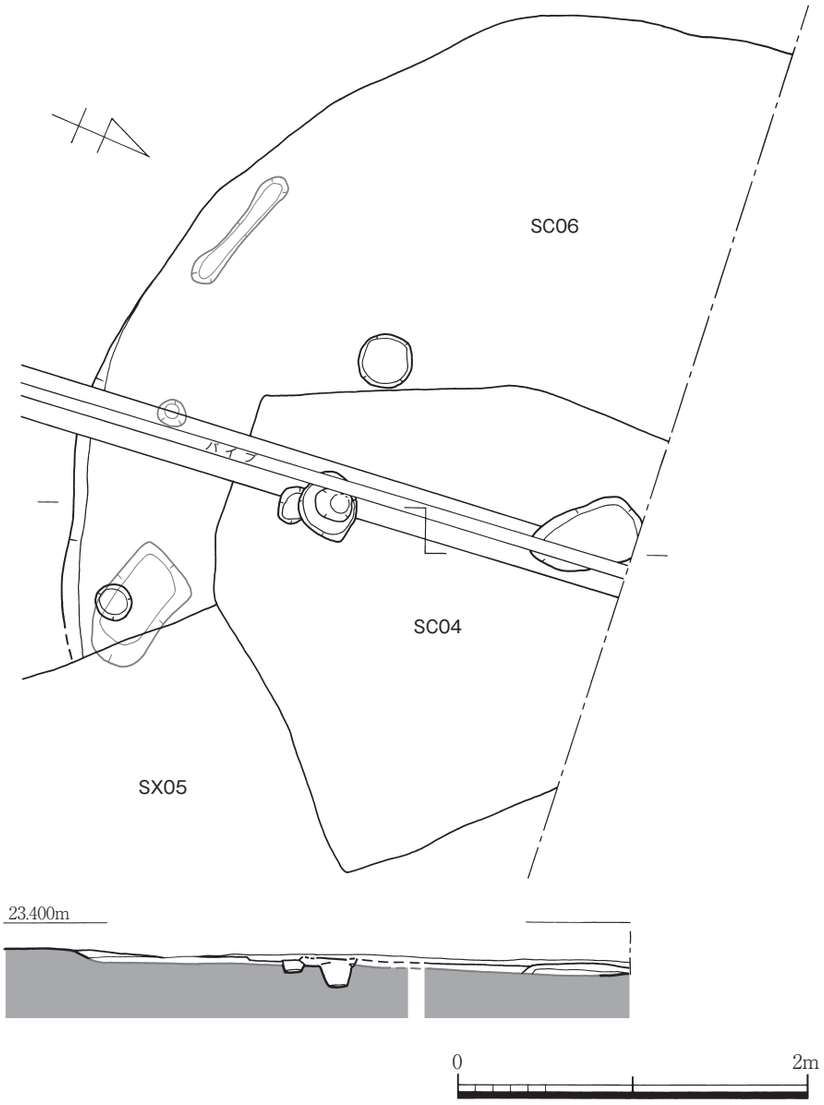
1. 黒 褐 色（10YR 2/2）粘質土＋黄褐色粘質土ブロック
2. 黒 褐 色（10YR 2/3）粘質土に 5mm 程度のブロック状黄褐色土が 2%ほど混じっている。
3. 褐 色（7.5YR 4/4）粘質土＋灰褐色粘質土ブロックまじり

1. 黒褐色土（10YR 2/2）黄褐色が少量混じり＜埋土＞土器を含む。
2. 褐色土（7.5YR 4/4）橙色の 1 ～ 2cm のブロック状粘質土が混じっている。
3. 黒褐色土（10YR 3/2）0.5mm 程度の砂が混じっている。
4. 黒色（10YR 1.7/1）粘質土に 1 ～ 2cm 程度のブロック状黄褐色土が混じっている。

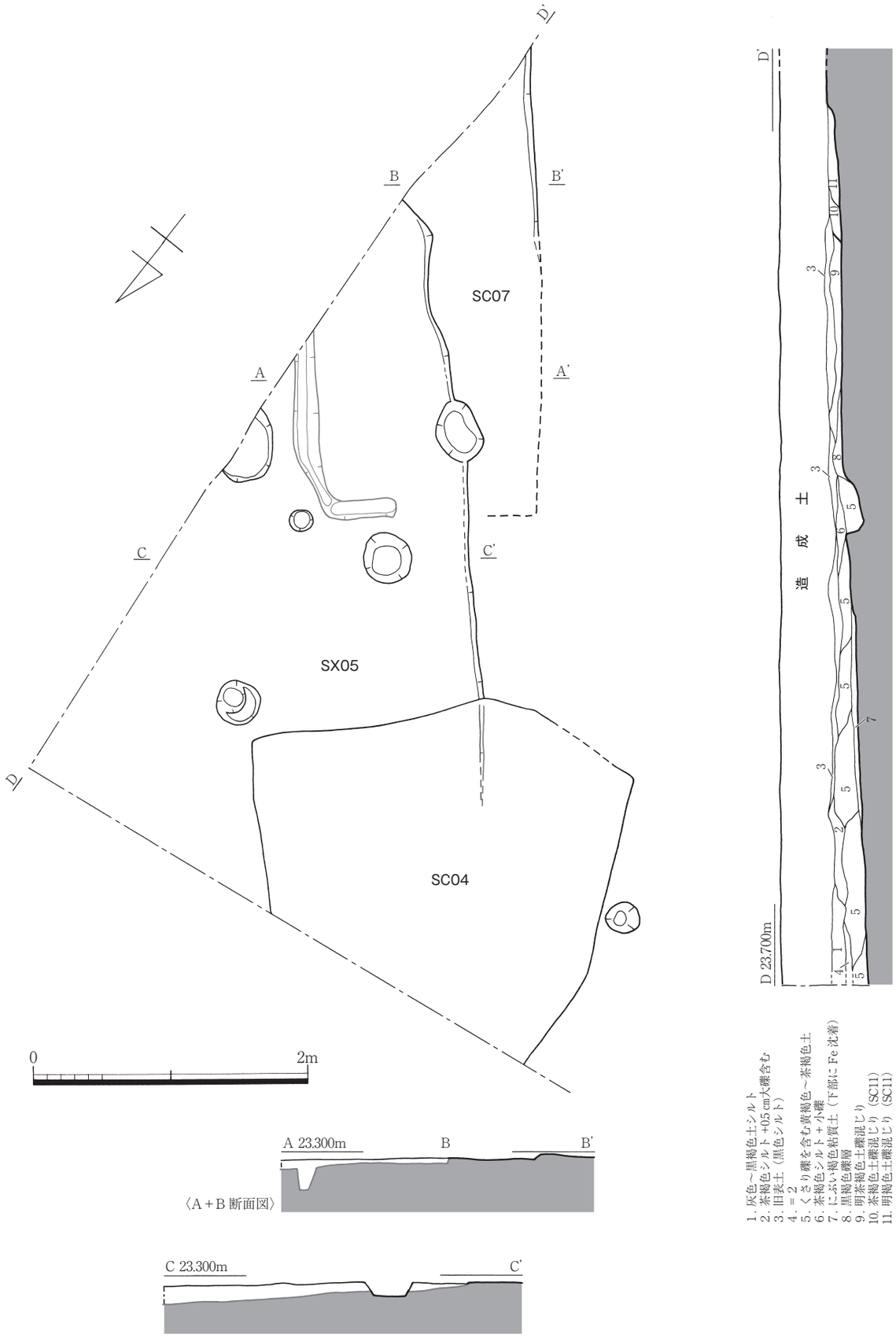
第 4 図　SC01 平・断面図（S = 1 /40）



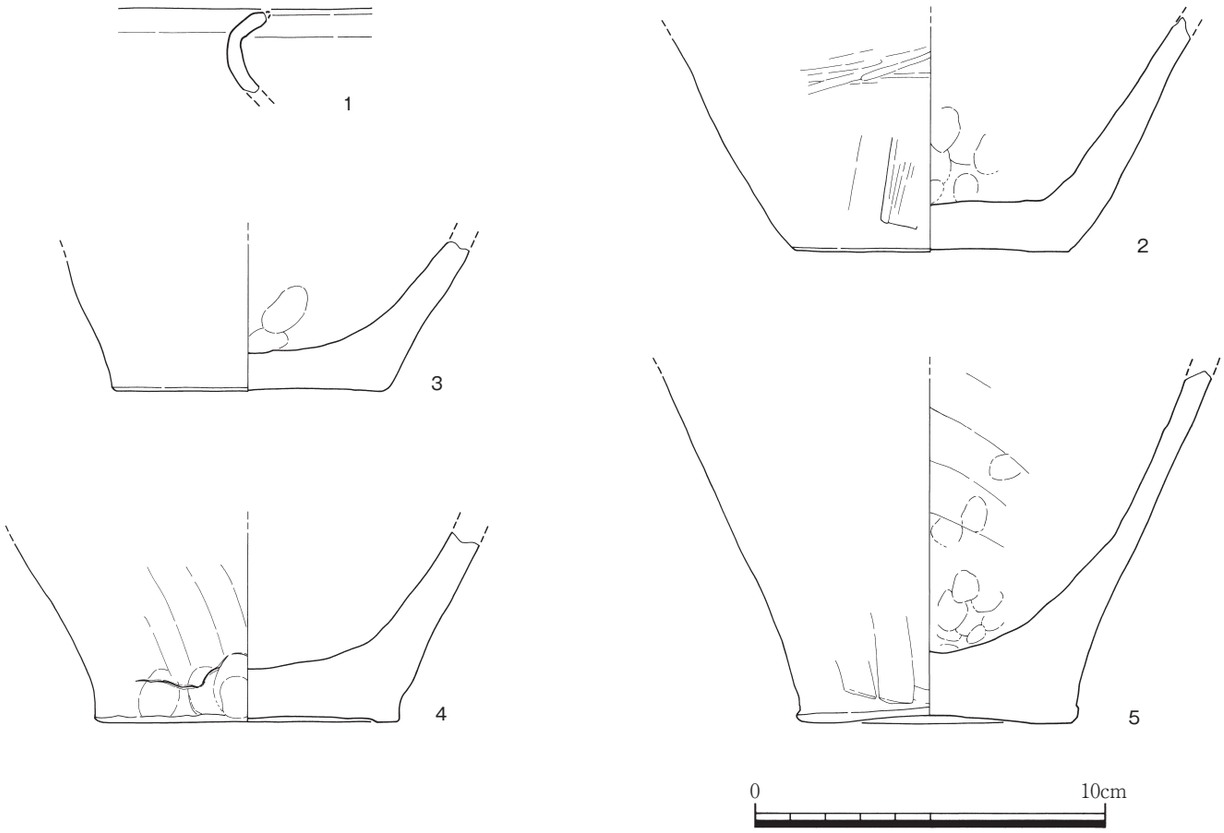
第５図　SC02・03・04 平・断面図（S = 1 /40）



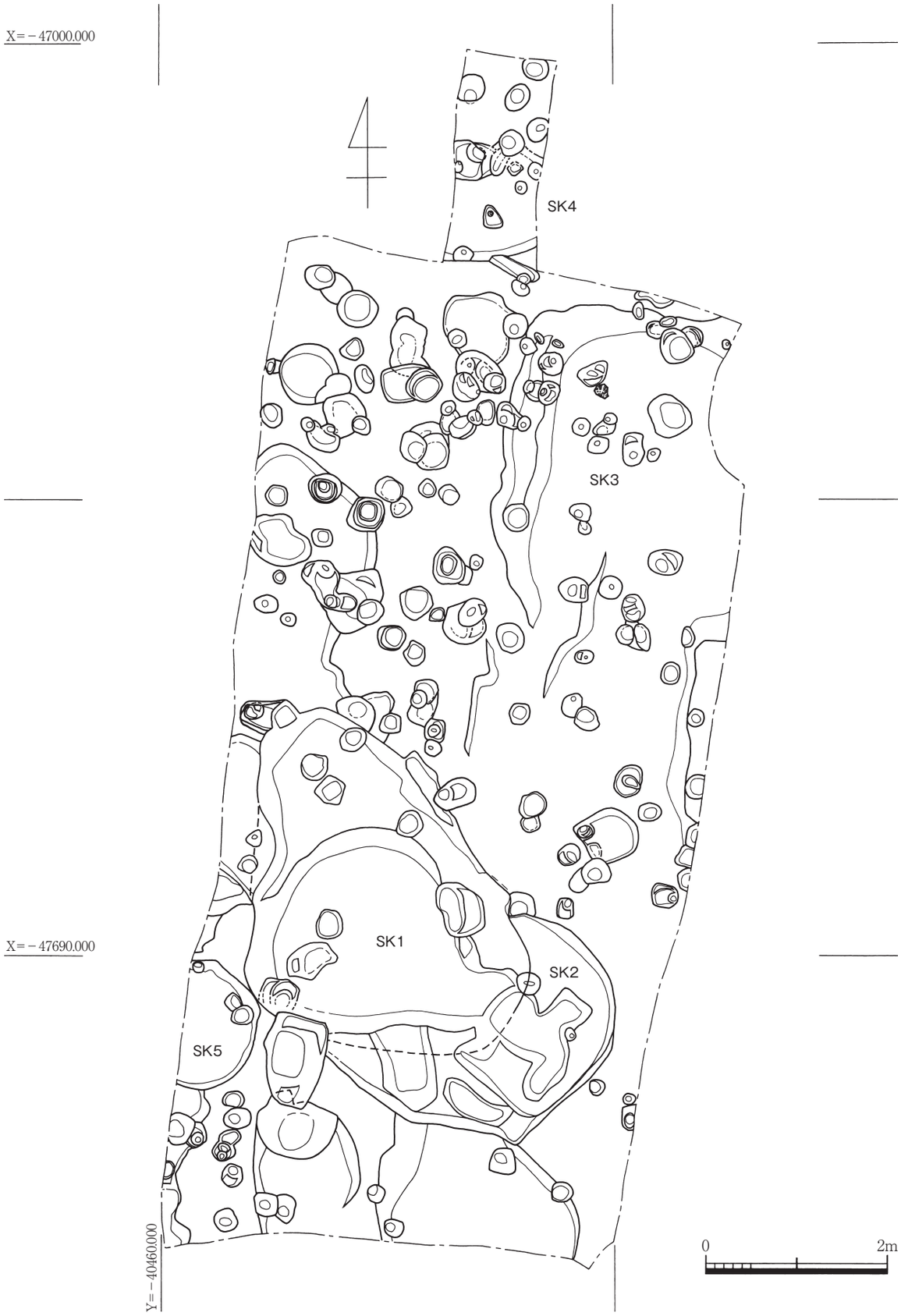
第６図　SC06 平・断面図（S = 1 /40）



第７図　SX05　SC07 平断面図（S ＝ 1 /40）



第８図　三国小学校遺跡６出土土器実測図（S = 1 / 4）

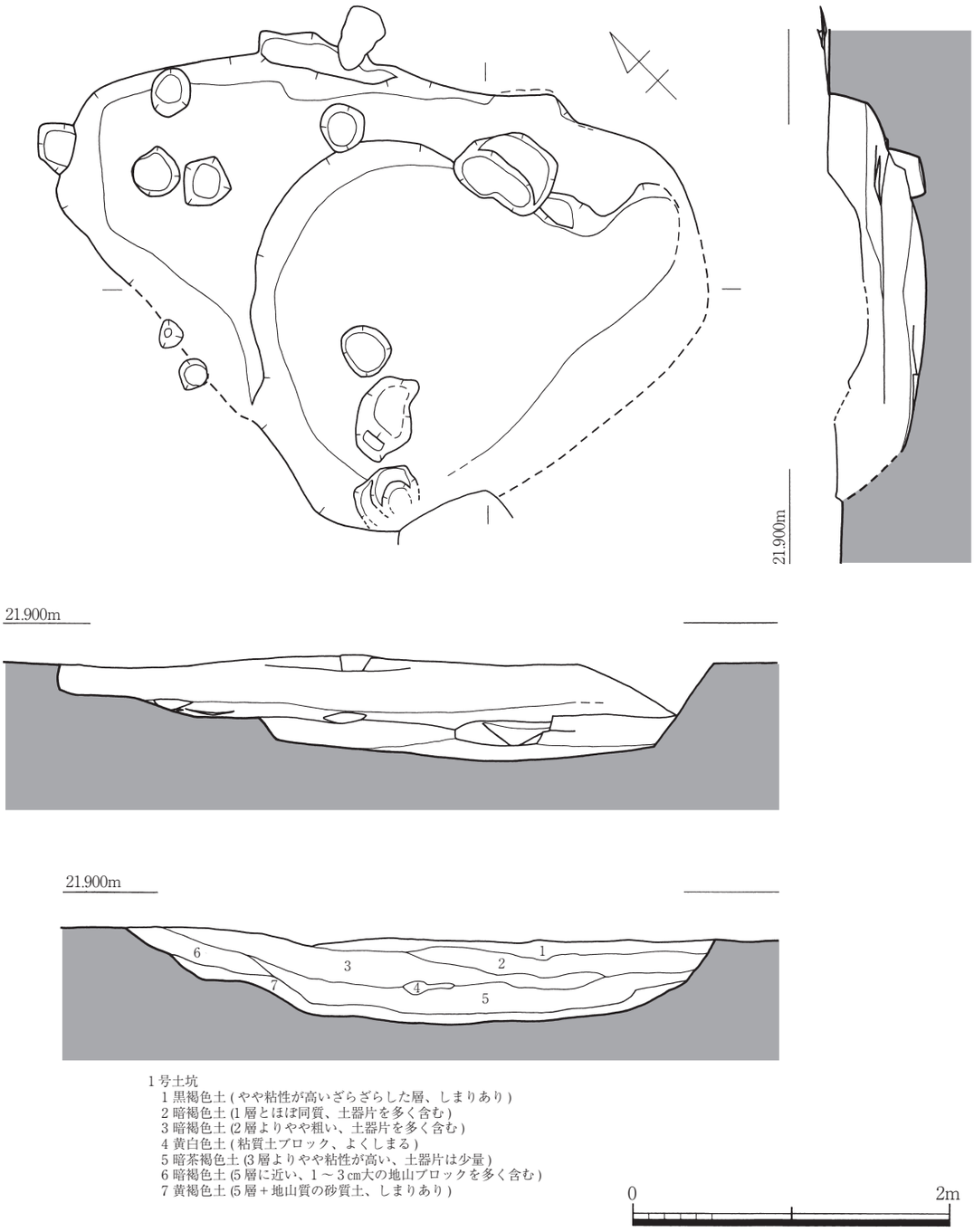


第９図　三国小学校遺跡７全体図（S ＝ 1 /60）

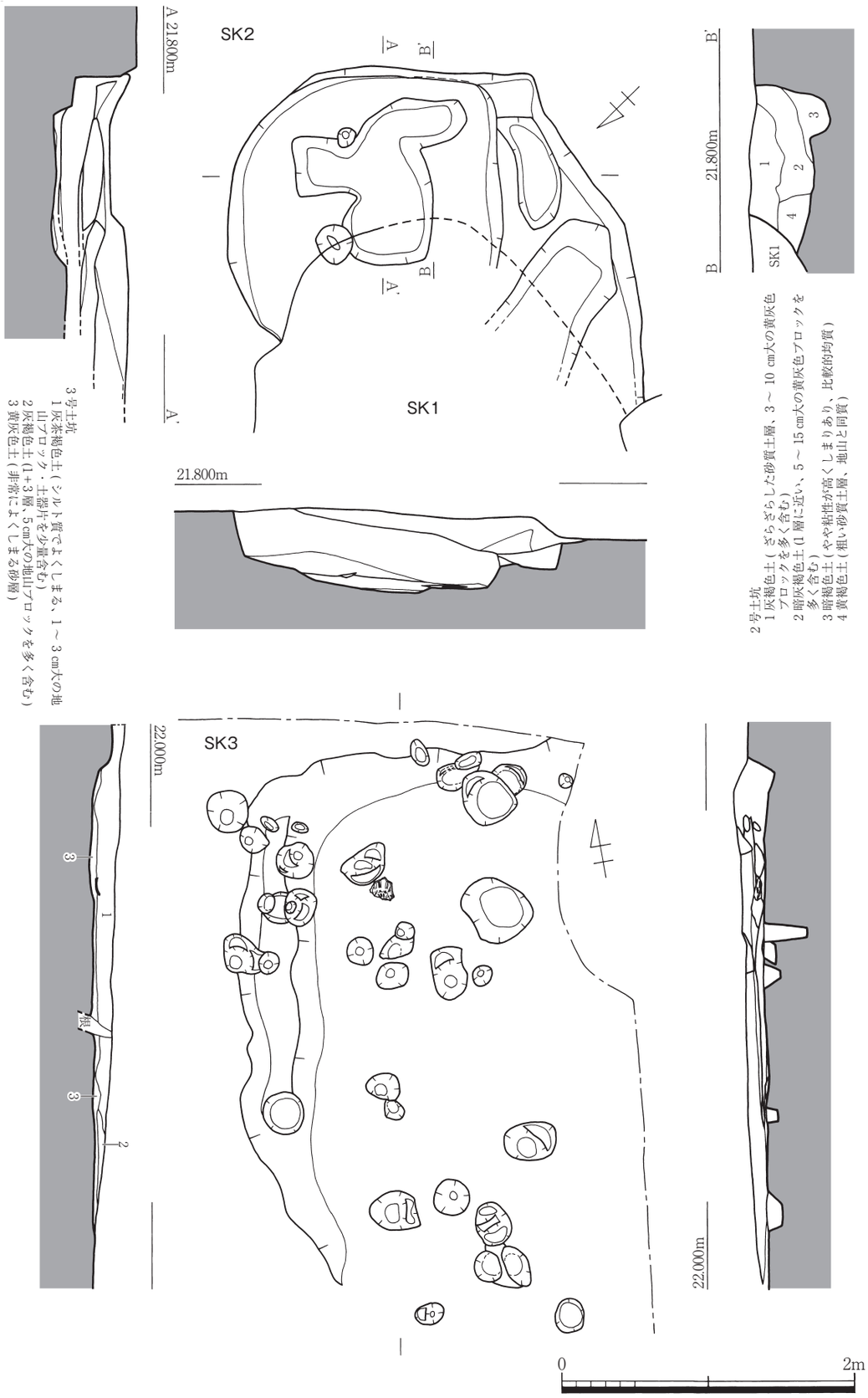
第４章　三国小学校遺跡７の調査成果

１．調査の概要

三国小学校遺跡７で検出した主な遺構は、土坑５基とピット群である。遺構の密度は高く、一部に近世の遺物を含む。今回の調査区のすぐ北側に位置する三国小学校遺跡５次調査区においても同様の状況で、中世以降の遺跡の広がりを確認することができた。



第 10 図　１号土坑実測図（S ＝ 1 /40）



第 11 図　2・3号土坑実測図（S = 1 /40）

2．調査の成果

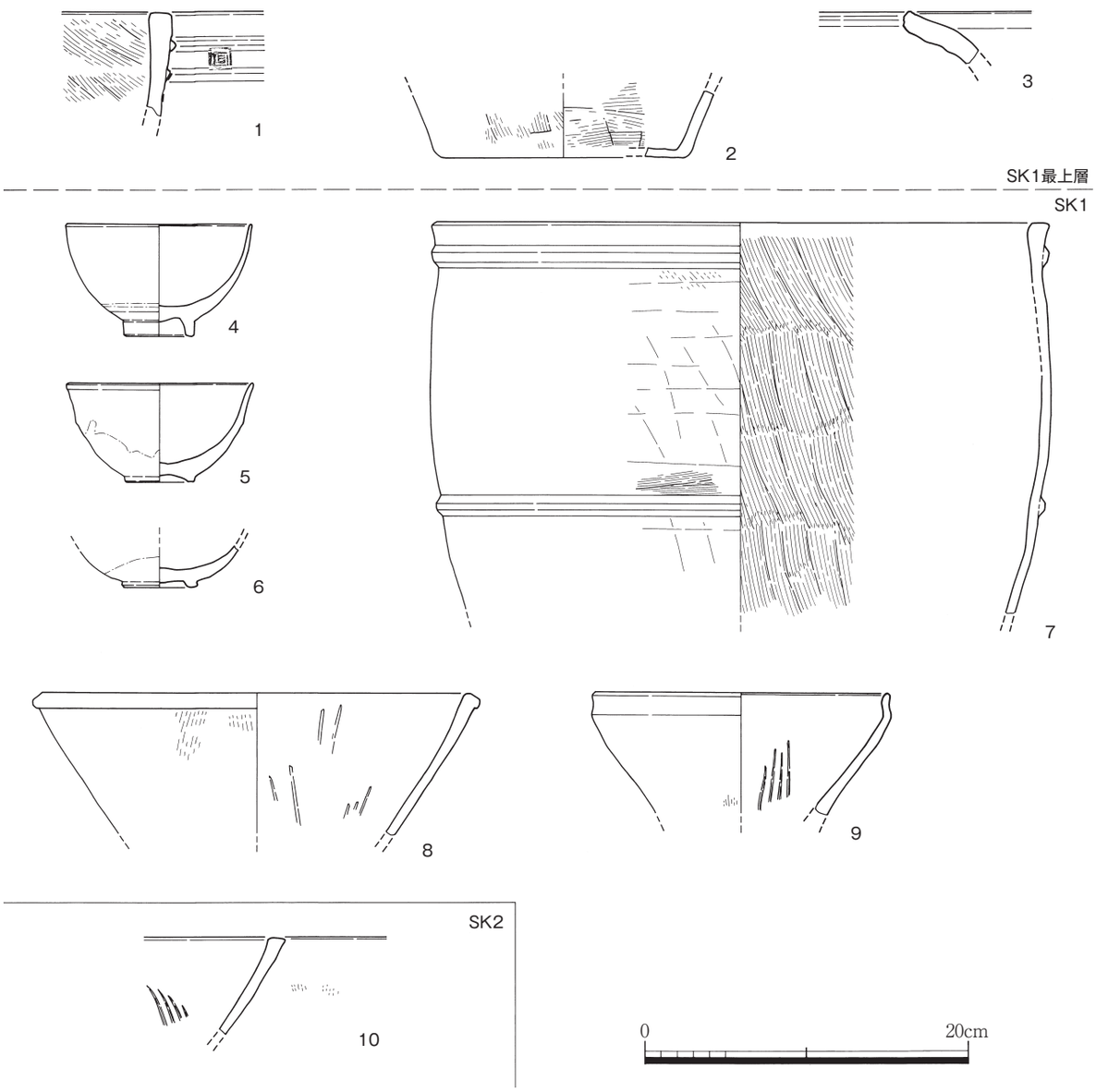
（1）土坑

1号土坑（第10図　図版5）

調査区中央部やや南側に位置する大型の遺構で、検出面の標高は21.7ｍを測る。2号土坑を切る。平面は不整楕円形で、大きさは検出面3.91ｍ×2.85ｍを測る。遺構の南側が一段低く、下端は2.60ｍ×1.94ｍ、深さは最大62㎝を測る。埋土は全体的に均質で、レンズ状の自然堆積である。第2・3層から比較的多くの遺物が出土した。

出土遺物（第12図　図版6）

第12図1～3は最上層から出土した遺物である。1・2は瓦質土器の火鉢で、1は外面口縁部下位に突帯を2条巡らせ、その間に「日」を枠で囲むスタンプ印がある。2は底部で、復元底径15.0㎝を測る。3は陶器の甕口縁部小片である。4～9は埋土中から出土した。4～6は磁器の碗で、4は復元口径11.6cm、器高7.0cm、5は復元口径11.6cm、器高6.1cmを測る。4の外面に文様が見られる。7は大型の瓦質土器火鉢の胴部から口縁部にかけてで、復原口径38.2cm、残存高24.2cmを測る。外面口縁部下位と胴部中位に断面台



第12図　1・2号土坑出土遺物実測図（S＝1/4）

形状の突帯を各１条有する。8・9 は瓦質土器の摺鉢で、8 は復元口径 27.7cm、9 は復元口径 18.5cm を図る。9 は、口縁部が屈曲して直線的に立ち上がる。いずれも内面に摺り目が残る。

2 号土坑（第 11 図　図版５）

調査区中央部やや南側に位置し、検出面の標高は 21.7 m を測る。1 号土坑に切られる。平面は楕円形状で、大きさは検出面で 3.24 m × 2.40 m以上を測る。遺構の東側が一段低く、下端は 1.77 m以上 × 1.76 m、深さは最大 47cmを測る。

出土遺物（第 12 図）

第 12 図 10 は摺鉢の口縁部小片で、内面に摺り目が残る。

3 号土坑（第 11 図　図版５）

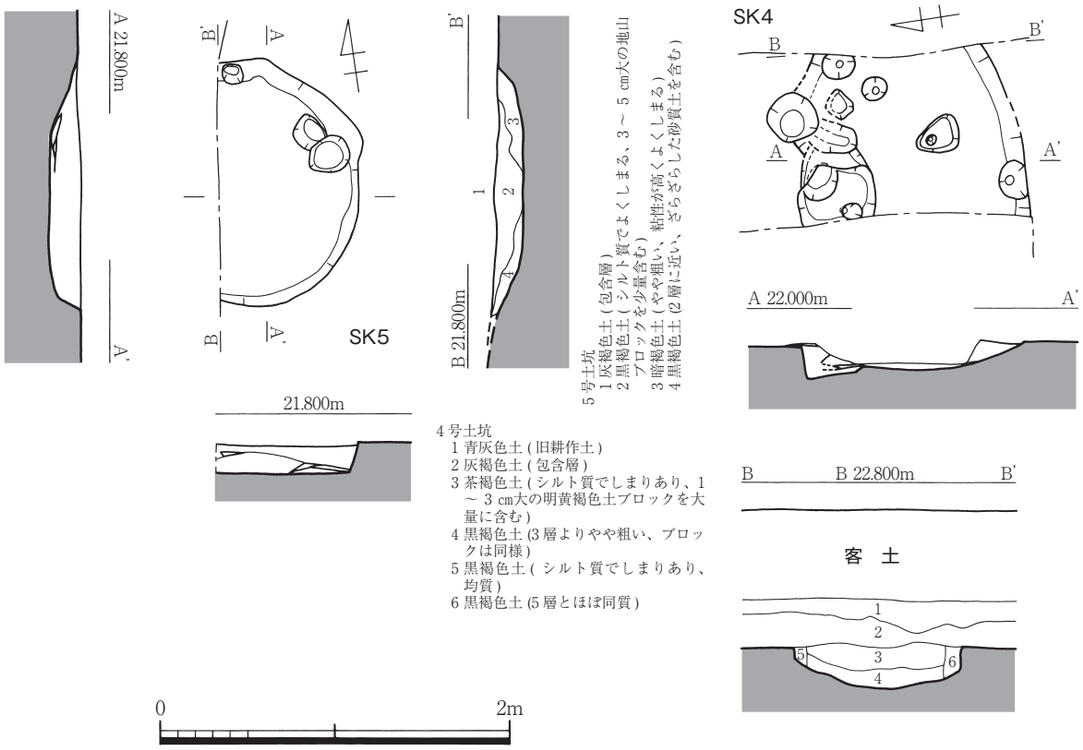
調査区の北東部に位置し、検出面の標高は 21.7 m を測る。遺構は南北に長い長方形状を呈するが、南側は削平により残っていない。東側は、調査区外に延びる。大きさは、検出面で 3.58 m × 2.72 m以上、下端で 3.37 m × 2.25 m以上を測り、深さは最大 14cmである。

出土遺物（第 14 図）

第 14 図 1･2 は瓦質土器の火鉢で、1 は床面直上から出土し、復元底径 11.5cmを測る。内面には摺り目がある。2 は脚部の小片で、体部外面にはミガキを施す。

4 号土坑（第 13 図　図版５）

調査区の北端部に位置し、検出面の標高は 21.8 m を測る。遺構は楕円形状を呈すると考えられるが、東西が調査区外に延びるため、詳細は不明である。現状の大きさは、検出面で 1.24 m × 1.00 m以上、下端で 1.09 m × 0.95 m以上を測り、深さは最大 12cmである。



第 13 図　４・５号土坑実測図（S ＝ 1 /40）

出土遺物（第 14 図）

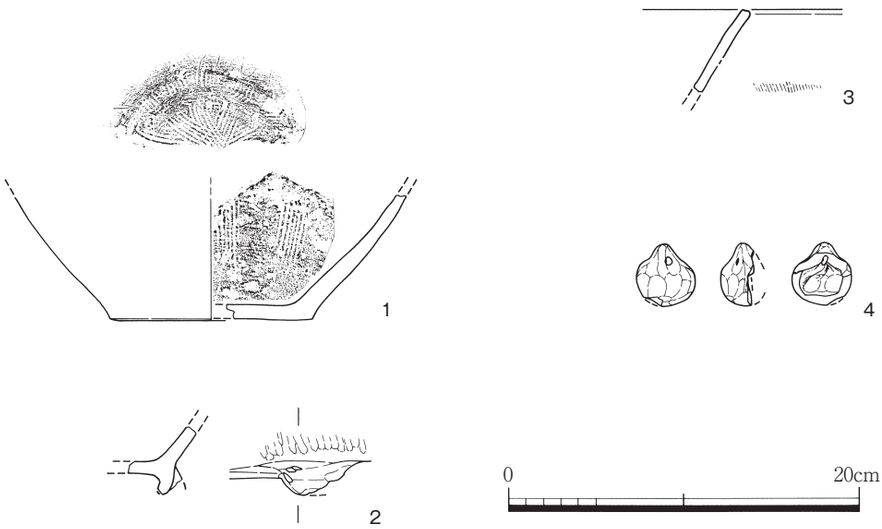
第 14 図 3 は土師質の鉢で、外面にハケ目が残る。

5 号土坑（第 13 図　図版５）

調査区の南西部に位置し、検出面の標高は 21.6 m を測る。遺構は楕円形状を呈し、西側半分は調査区外に延びる。現状の大きさは、検出面で 1.41 m × 0.82 m以上、下端で 1.25 m × 0.75 m以上を測り、深さは最大 19㎝である。

出土遺物（第 14 図　図版６）

第 14 図 4 は土師質の土鈴である。大きさは縦 3.6㎝、横 3.4㎝で、玉は残っていない。



第 14 図　３～５号土坑出土遺物実測図（S ＝ 1 ／ 4）

第５章　調査成果のまとめ

１.三国小学校遺跡６について

三国小学校遺跡第６次調査では、弥生時代前期の松菊里型住居１軒、出土遺物がなく詳細時期不明な方形住居４軒、円形住居１軒等が確認された（第３図）。

これまでの調査（第１図）では、第１次調査で弥生時代中期末から後期初頭の住居跡３軒、円形周溝状遺構１基、掘立柱建物１軒の集落遺構、第２次調査で１次調査と同時期の住居跡１軒等が検出された（小郡市教委 1981・1987（前掲 p3 註１・２））。第３次調査で弥生時代の遺構では掘立柱建物１軒、円形周溝状遺構２基、竪穴住居跡２基が調査された。詳細な時期は遺構の残存が悪く不明であるが、１・２次調査と同様の時期に収まるかと考えられた（小郡市教委 1997（前掲 p3 註３））。

隣接するみくに保育所内遺跡１次調査では弥生時代後期中葉～後半の住居跡４軒、そのうち１号住居からは方格規矩鏡片が出土している（小郡市教委 1981（前掲 p3 註６））。そのほか、弥生時代後期前半の周溝状遺構、弥生時代前期の貯蔵穴４基が確認された。貯蔵穴からは板付Ⅰ式新段階の甕と小壺が出土している。

みくに保育所内遺跡の２次調査と３次調査では大溝が方形住居跡を切って検出されている（小郡市教委 1997・2015（前掲 p3 註６））。規模 1.75 m～ 1.9 m、深さ１m程度、断面形は逆台形を呈している。台地縁辺にあたり環濠と想定されている。２次調査で大溝内から出土した土器が報告されているが、実見して確認したところ、弥生時代中期末～後期初頭の土器と弥生時代前期の土器があり、大溝の所属時期は中期末～後期初頭の土器と組み合う時期であろう。調査部分が矮小のため、存続期間についての詳細は分からない。

以上のことから、環濠と推定される大溝は三国小学校遺跡やみくに保育所内遺跡で確認されている遺構のうち、弥生時代中期末～後期初頭の住居跡や掘立柱建物、円形周溝状遺構などと関係するものである。

三国小学校遺跡・みくに保育所内遺跡の既往の調査成果から、①弥生時代前期集落の存在、②弥生時代中期末～後期初頭の大溝を伴う集落の存在、③弥生時代後期中葉から後半の集落の存在がうかがえる。

今回の調査では明確な出土遺物は SC01 分のみであるが、既往の調査成果と併せて、検出遺構の所属時期を推定しておく。６次調査 SC01 松菊里型住居、SC06 円形住居が弥生時代前期集落に伴うもので、ベッド状遺構を持つ SC02（長）方形住居、SC07（長）方形住居が地域の住居形態変遷を考慮すると弥生時代後期のものかと考えられる。SC03 は SC02 に切られるため、弥生時代後期以前の所産の可能性があり、SC07 を切る SX05、SX05 を切る SC04 は弥生時代後期以降の所産の可能性が考えられる。

みくに保育所内遺跡２・３次調査（第１図）で確認された大溝の延長は今回の調査ではみられず、別の方向へのびるもしくは途切れる可能性が考えられる。三国小学校遺跡の東側では、地形が落ちており、西側は南西側から北東へのびる小さい谷の谷頭付近となっている。現地形は標高の高い部分が大きく削平を受けており、丘陵の縁辺部分での各時期の集落遺構が確認されている。三国小学校遺跡の中心部分については現状では不確かであるが、西側に入る谷に沿う形で弥生時代の集落が確認できる。

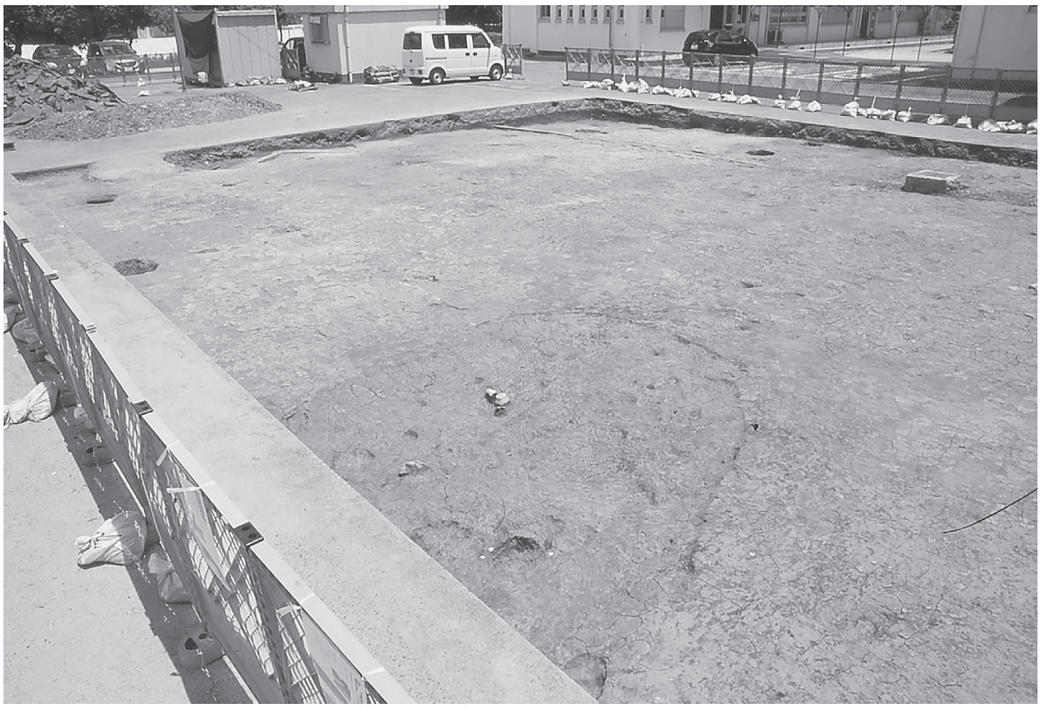
三国丘陵に着床した稲作農耕集落である力武内畑遺跡（第２図８）やその対岸にある三沢南崎遺跡、横隈山遺跡（第２図６）と谷筋を共有する集落である。三国丘陵全体では弥生時代中期中頃以降に集落活動が衰退するが、再び中期末頃から散在的に集落がみられるようになる[註1)]。この三国小学校遺跡もそれらの弥生時代中期末から後期初頭段階の集落である三沢南崎遺跡や力武内畑遺跡と同様、回帰的な集落変遷をたどっている。そのなかでも、舶載方格規矩鏡片を保有した三国小学校遺跡の集団像は興味深いものであろう。

註１）山崎頼人 2010 c「環濠と集団―筑紫平野北部三国丘陵からみた弥生時代前期環濠の諸問題―」『古文化談叢』第６５号

図　　版

図版 1
（三国小学校遺跡 6）

①三国小学校遺跡６全景（北から）

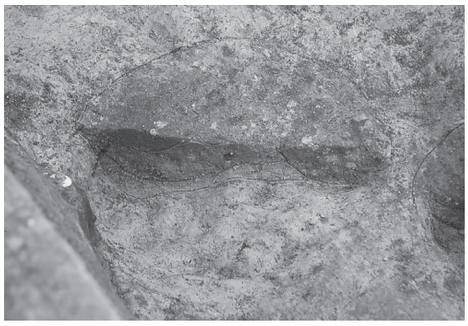


②調査区南半遠景（南西から）

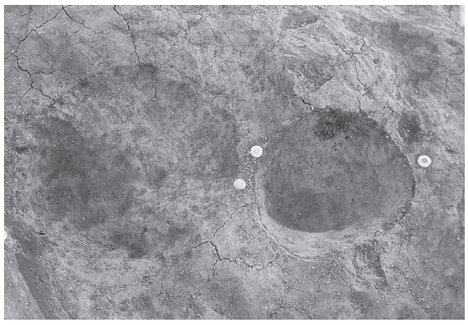
図版 2
（三国小学校遺跡 6）

① SC01 土層断面（南東から）

② SC01 土層断面（南から）


③ SC01 中央土坑土層断面（西から）

④ SC01P1 土層断面（西から）


⑤ SC01 中央土坑と P1（西から）

⑥ SC01 全景（北東から）

⑦ SC01 土器出土状況（南から）

⑧ SC02 全景（西から）

図版 3
（三国小学校遺跡 6）

① SC04 全景（北から）

② SC06 全景（南から）

③ S X 05 土層断面（南西から）

④ S X 05・SC07 土層断面（西から）

⑤ S X 05・SC07 全景（北西から）

⑥遺構掘削作業風景（南東から）

⑦三国小学校児童見学風景①

⑧三国小学校児童見学風景②

図版 4
（三国小学校遺跡 6）

1（SC01・2）

2（SC01・4）

3（SC01・3）

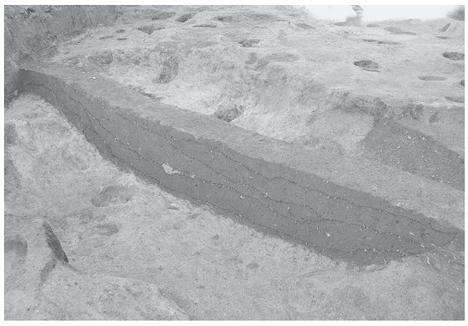
4（SC01・5）

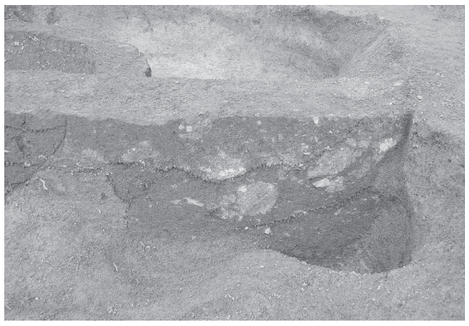
三国小学校遺跡６出土遺物

図版 5
（三国小学校遺跡 7）

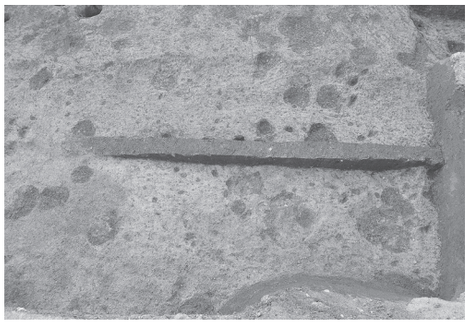
①調査区全景（北側から）

② 1・2 号土坑完掘（南西側から）

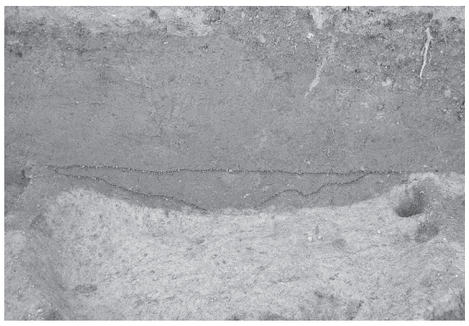

③ 1 号土坑土層（南側から）


④ 2 号土坑土層（南西側から）

⑤ 3 号土坑土層（西側から）


⑥ 3 号土坑完掘（東側から）

⑦ 4 号土坑完掘（南側から）


⑧ 5 号土坑完掘（東側から）

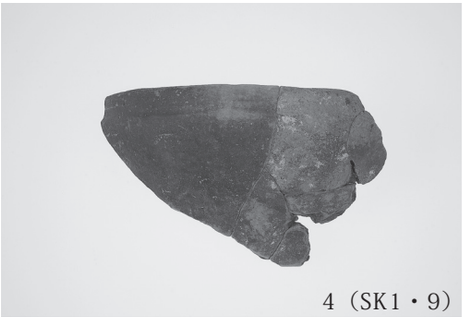
図版 6
（三国小学校遺跡 7）

1（SK1・5）

2（SK1・7）

3（SK1・8）

3（SK1・8）


4（SK1・9）

4（SK1・9）

5（SK3・1）

6（SK5・4）

三国小学校遺跡 7 出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	みくにしょうがっこういせき６・７
書名	三国小学校遺跡６・７
副書名	
巻次	
シリーズ名	小郡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第 332 集
編著者名	山崎頼人（編）　杉本岳史
編集機関	小郡市教育委員会　小郡市埋蔵文化財調査センター
所在位置	〒838-0106　福岡県小郡市三沢 5147-3　℡0942－75－7555
発行年月日	令和２年３月 31 日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
三国小学校遺跡（みくにしょうがっこういせき）6	福岡県（ふくおかけん）小郡市（おごおりし）三沢（みつさわ）	40216		33°42′37″	130°56′43″	2018・5・1～2018・5・30	398.66㎡	給食施設建設
三国小学校遺跡（みくにしょうがっこういせき）7				33°42′29″	130°56′50″	2018・12・5～2018・12・27	200㎡	学童保育施設建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三国小学校遺跡	集落	弥生 中世 近世	住居 土坑	弥生土器 瓦質土器 陶磁器	

三国小学校遺跡でこれまでに確認されている弥生時代中期から後期集落の広がり及び中世から近世にかけての生活遺構の広がりを確認できた。

隣接するみくに保育所内遺跡で確認されている前期の貯蔵穴・遺物からうかがえる前期集落の存在が三国小学校遺跡６で検出された前期住居によって確かなものとなった。

三国小学校遺跡７で確認した中世から近世にかけての遺跡の広がりは周辺の力武遺跡群や横隈遺跡群でも確認されており、旧筑前街道との関係も示唆されているところである。

三国小学校遺跡６・７

小郡市埋蔵文化財調査報告書第 332 集

令和２年３月 31 日

発行　小郡市教育委員会
小郡市小郡 255－1

出版　片山印刷有限会社
小郡市祇園 1－8－15